

蜂谷休齋宗悟 蜂谷伯書守頼重孫、居于江州松本、始姓稱松本、香事傳授於省巴隆勝兩人、天正十二年八月十八日卒、茶事紹鷗弟子。

宗因 宗悟子、一任齋、宗富、號桂山、宗因養子、宗清、號然齋、宗榮、宗清子、號陽山、名常里。

宗先 宗榮子、交名丈助、號葆光齋、名宜豐、元文二年四月十八日卒、藤野專齋、宗先實子、早没無嗣。

〔香道千代の秋〕序千代の後まで傳ふべきものは紙上の語なり、金石に鐫ものもかぎりありて磨滅す、道をのせことを傳べきは只書のみ、傳寫して斷ざる時は、千歳に芳を流むもの歟、爰に香を翫の事既にふれり、文龜の頃より、上に逍遙院公ありて、下に志野氏世に出、香道是より定りぬ、志野は三世家聲を墮す、これにつげるものは建部氏なり、其後米川氏志野の古流を受繼て、かへつて己が一流を起す、其比の諸士に卓越すといへども、其後繼るものなし、名のみ残て其書世に多く傳はらず、何を以か繼ておこすものあらむ哉、米川没て香道衰微せり、爰に先師流芳子枝大御家の末流を汲て、其餘の諸流を集て大成し、香道の古法を起むとはかる、先に初心をみちびく書許多編をあらはしぬ、今又此書なりぬ、よつて日月を書して是が序となし、がまふ野に若むらさきの蘭千代の秋まで句へとぞ思ふのみ。

享保十八癸丑年正陽上澗

洛西三雙巒謹題

〔香道濫觴傳書〕米川流といふは、米川常伯、俗名紅屋三右衛門といふ者なり、京都市間人一任と號坂内宗拾が六哲の一人に、相國寺の芳巢松軒元和延寶の人なり長老といふ人の門人なり、後一流を建立して米川流といふ、東福門院へ被召出、致御目見承貴命、右常伯達味傳來書、南都古梅園主姪玄察といふ人に傳る。
〔古學先生文集五筆記〕同志會筆記
予友米川常白、有范蔚宗之癖、其入神極妙、雖易牙之於味、孫陽之於馬、莫之能過、都下嗜聞香者、皆以聖稱之。